
神が創りしもう一つの世界

ティーア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神が創りしもう一つの世界

【Nコード】

N8026Z

【作者名】

ティーア

【あらすじ】

神の怒りに触れた二人の天使。

彼らが戻ってきた時の失敗から、少しずつ狂い始める。

フィクションです！実在の宗教、及び歴史とは何の関係もありません！

大喧嘩の末に（前書き）

一部宗教に喧嘩を売るような展開になるかと思っています。

それでも大丈夫という人だけ進んで下さい。

大喧嘩の末に

<プロローグ>

「あーあ……。またか」

世界の端が消し飛んだのを感じた彼は、椅子の肘置きに頬杖を突く。
「何でこんなに仲が悪いんだかね。いや、逆に仲がいいのかもしれないけど大迷惑だつて。自分達で直せよ、全く」
しばらくブツブツと文句を言い続ける。

「……何を言ってるんですか？」

その横で書物を読んでいた一人の青年が、呆れたような声で問いかける。

「ほつとけ。もう、放つて置いてくれ。自分が何を言おうと関係ない」

「主……。大丈夫ですか？原因は大よそ予想がつきますが」

「だったら仲裁のついでに連れてきて。いい加減、頭にきた。何とかしてでも解決してやる」

青年は苦笑いしながら頷くと、一瞬でこの場から消え去った。恐らく、消し飛んだ世界の端まで行ったのだろう。

「さて、次は……」

目を閉じた彼はふふつ、と笑ってから目を開ける。すると彼の目の前に、先程までいた青年と他二人が立っていた。

「俺は悪くありません！全て隣の奴が悪いんです！」

「先に手を出してきたのはお前だ！……。何でまたこんな場所に来なければいけないのかっ」

剣を帯びた方が我先にと訴え始めると、隣で腕を組んで立っている方が悪態をつき始める。さっきまで静かだったこの場が、急にうるさくなった。

「はいはい。で、ガブリエル。結果は？」

「はい。いつもの通りです」

聞かなくとも全てを知っているのだが、二人の訴えを受け流すためにそう聞いたのだった。

「だよねえ」

頬杖を突くのをやめる。

「それで、二人は気が済んだのか？」

酷く冷たい声で、彼が言う。その途端、言い争っていた二人もその威に負けて黙り込んだ。

「私はいいい加減、お前達の争いに飽きた。何故和解しようとしなののか」

一度言葉を切ると、彼は右手を前へ差し出す。そして、そのまま振り下ろした。

「時が満ちるまで、向こうで頭を冷やせ。わかったな？」

「そんな・・・ちよっ」

ただの光の玉と化した二人が、揃ってどこかへ飛んでいく。

「・・・いいんですか？」

「もちろん。向こうにはヨエルもいるしね」

どうなるかな。と呟く彼は、久し振りに感じた“わからない”に口
の端を歪ませた。

戻されて失敗

一章

「あーあ、やっと終わった！帰ったら寝よーっと」

大きく伸びをして、制服姿の少年が言う。

周りの人が不審な目を向けてくるが、本人は全く気にしていない。

「その前に宿題やれ。まだ明日もあるじゃねえか」

一緒に歩いている、同じ制服のもう一人が彼に現実を突き付ける。

「じゃあ、宿題やってよ」

「それだと意味ないだろ？大体、宿題は自分でやるからこそ意味のある事だ」

「宿題なんてやったって無駄だし。僕、やんなくてもいいし」

片方がむすくれた。

どこからどう見ても友達にしか見えない二人。実は（年齢は同じだが）兄弟だったりする。だが、全く似ていない。

一人は童顔。もう一人は大人っぽい顔立ちをしているため、実年齢は同じでも友達同士に見られがちである。

「開き直るな。お前はそれでいいかもしれないが、こっちはいい迷惑だ」

言い忘れたが、開き直った方が勇哉で、本当に迷惑そうにしている方は拓哉という。

いつもの様に学校から帰っている途中で、その先にある曲がり角を曲がれば二人の家に着く。二人のが通っている中学校から割と近くにあるため、十分足らずで着く事が出来た。

曲がり角を曲がった時、勇哉が立っていた人とぶつかった。

「ひゃあっ」

「おっと、悪い。大丈夫か？」

しりもちをついた勇哉に手が差し伸べられる。

「すみません」

「バーカ。前見て歩け」

立ち上がった所を拓哉が軽く殴る。それに「ふええええ・・・」と変な声をもらした勇哉。そんな二人を見ていた彼は、何かに気付いたらしく探るような目を向けていた。

「そうか・・・ここで待ってて正解だったらしいな」

そんな彼の呟きに、拓哉が反応する。

「おっさん、何言ってるんだ？」

「いや、こつちの話だ」

不思議なその雰囲気二人は飲まれて、彼に集中せざるをえなかった。

「俺の主がお前らを呼んでたぞ？十四年もご苦労なこつた」

ニヤニヤ笑いながら言う彼に、拓哉が食って掛かる。

「んだよ、おっさん。言いたい事があるならはつきり言え」

腕を組み、左に顔を傾けて睨み付ける拓哉。

「その癖も一緒か。ま、どうせ言ってもわかんねえって。覚えてないんだから」

「うえっ？」

「どういう事だ？」

そんな二人の質問には答えず、彼は右手を二人の方へ差し出す。

「こんなんでも思い出せばいいけどなあ・・・」

その手を振り下ろした時にはもう、二人はいなくなっていた。

「・・・あ、やべっ。失敗した」

「ふえっ？」

「・・・家の近所に森ってあったか？」

気が付けば森の中。

「うにー・・・。ない」

そう言つて勇哉はキョロキョロ周りを見る。だが、今まで歩いてきた道はなく、ただ一抱えありそうな木があちこちに立っているだけ

だった。

「だけど、これは間違いなく木だろ」

「そだね」

二人はしばらく沈黙して、急に取り乱した。

「どこお！？僕らどこに来ちゃったわけ？」

「意味わかんねえ……。もう全然意味わかんねえ……。」

勇哉は頭を抱えて、拓哉は完全に呆然としていた。

あの変な人が原因だという事は、パニックを起こした二人でも理解できた。出来たが、どんな方法でここまで来てしまったのか、前後左右木に囲まれている二人には確かめようが無かった。

「……とりあえず、状況を整理しよう」

まだ呆然としている拓哉だったが、それだけは言えた。

「あのおっさんの所為だろ？んで、意味不明な理由だったろ？気が付いたら森だろ……。って、意味ねえー！」

どうしようもなかった。

「拓哉拓哉、ちょっと聞いて。さっきのおじさんの顔、知ってる気がする。拓哉は？」

癖のない黒髪をぐしゃぐしゃにしながら頭の整理をしていた拓哉が、驚いた顔で勇哉を見る。

「……やっぱり、そうなのか？何かそんな感じはしたんだけどな、確信が持てねえんだよ。何ていうか、会い過ぎてた奴に、久し振りに会った感覚か？」

「僕に聞かないでえ……。」

勇哉の情けない声を無視して、拓哉はさっきとは打って変わって冷静に辺りを見渡した。少し話したら、落ち着いたようだ。

「ったく。ここはどこなんだ」

風一つ吹かない静かな森に、生き物の気配はあまりないように思える。

迂闊に動くことも出来ず二人が途方に暮れていると、後ろからガサガサと大きな音が聞こえてきた。その音に驚いた勇哉達は、一気に

振り返って更に驚く事となった。

「なあんだ。びっくりした。ドラゴンか」

「あ、ああ。・・・って、ちょっと待て」

我に返った拓哉が、じりじりと後退り始める。目の前にいるワニもどきから逃げる為に。

「俺の知識に間違いが無ければ、こいつは存在しないはずじゃないのか？」

「えと、言われてみればそうだね」

勇哉も拓哉に倣う。さすがに危険だと思っただけ。

「ここがどこだか、大体的見当はついた。信じたくはねえが、世界丸ごと違うんじゃないかって」

二人は顔を見合わせると、せーので逃げようとした。が。

「待て！」

鋭い静止の声がして、思わず立ち止まってしまった。

「リオラが言った事は本当だったのか。どうやってこの森に入った？ 答えろ！」

茶色のドラゴンの影から、飛行ゴーグルを付けた少年らしき人物が現れた。

彼はゴーグルを外すと、銀色の目で勇哉達を睨む。

「ここはエティルス神聖国の立ち入り禁止区域。お前達が入っていない場所じゃない」

自分達と同じぐらいの年齢の少年に言われたのが癪に障ったのか、拓哉がムツとした顔になる。

「知らねーし、んなふざけた話。大体、お前誰だ？」

「僕はシグルス。エティルス飛竜団、ガナム支部、第八番隊のリーダーだ」

堂々と答えた少年だが、拓哉を納得させるのには程遠かった。

「はあ？ なんだその、なんたら飛竜団。そこまでファンタジーなのか？」

ファンタジーなのには、違いがないが。

初めての反応だったのか、シグルスは拓哉と勇哉を交互に見る。

「・・・とにかく、お前達の身柄を支部に送検させてもらう」
そう言つてドラゴンを振り返る。

「リオラ、運べるな？」

その問い掛けに、リオラと呼ばれたドラゴンは大きく頷いた。

場所は変わつて、エティルス飛竜団ガナム支部。その建物にある小さな部屋に、勇哉達はバラバラに入れられていた。

「ふええええ・・・」

ふとした拍子にそんな声が漏れてしまい、勇哉は慌てて口を塞いだ。幸いな事に、部屋から出られないこと以外は何の制限もなかった。

拓哉大丈夫かな・・・。

そんな風に思つた矢先に拓哉の怒鳴り声が聞こえてきて、勇哉は苦笑した。

（何やつてんの？拓哉）

まるで遠くに呼びかけるように心の中で呟くと、驚くべき事に返事が返ってきた。

（誰も来ねえんだよ。さつきからずっと人を呼んでるんだがな。・・・そっちは？）

拓哉の声に勇哉が答える。

（誰も来てないよ）

（チツ。一体何なんだ、こんなところに入れて）

そんな風な会話をしていると、ガチャツとドアが開いた。

「支部長。こちらです」

聞き覚えのある声がしたと思ったら、シグルスだ。奥にいた人を先に、自分は後から入る。

シグルスから支部長と呼ばれた人物は、勇哉の前に立つと微笑んだ。
「うえ？」

素っ頓狂な声を上げる勇哉に、シグルスはむっとした顔をする。

「そう警戒しなくていい。俺は興味本位で来ただけだから」

支部長はそう言うと、シグルスを振り返る。それにシグルスは肩を竦めて答えたただけだった。

「何ですか・・・？」

「あー、いや。君の顔をどっかで見た気がするんだけど・・・人違いか？」

「さ、さあ？」

苦笑いしながら首を傾げた勇哉。

「確かに僕の知り合い、というかアレを子供にしたらこんな感じにはなるとは思いますけど」

ドアに寄りかかって腕を組んでいるシグルスが呆れたように言う。

「あの喧嘩の後、二人共いなくなってるからって勝手に決め付けるな？」

「はい、そうです。主から何か告げられている奴は、ビュレス持ちでもないからです」

しばらく支部長とシグルスをを食い入るように見詰めていた勇哉だが、顎に手をやると考え始めた。

「ビュレスって、“祝福を受けた力を賜う”的な意味？」

そんな呟きを洩らした勇哉に、支部長が訝しげな顔をする。まさか自分から話しかけるなんて、思っていたのだろう。

「原義では、そうだが」

「何で知ってるんだろう？何かわかります？」

「さすがに、それはわからんな」

支部長が唸りながら顎を扱く。

「ところで、君の名前は？」

その問いに勇哉ははっとする。

「勇哉です。ただの勇哉」

慌てて答えた勇哉を見て、支部長は苦笑いする。

「あっちの友達は？」

「拓哉です・・・あの、拓哉は一応戸籍上では双子の兄なんです

けど」

しゅんとなった勇哉の前では、二人が啞然とした顔になっていた。
沈黙。

「や、これはちよつと、理解するのに時間が・・・」

拳動がおかしくなり始めている二人に、勇哉は首を傾げる。

「何だつて？僕と弟ですら似ている所はあつたのに」

「うえ？シグルスさんにも弟いるの？」

勇哉の質問には答えない。いや、答えられるだけの余裕がない。

「なあ、シグルス。ちよつと聞いてきてもらえるかな？これは益々怪しくなつてきた」

「は、はい。やるだけやってみます」

急いで部屋を出て行つたシグルス。それを見送つた支部長はため息をつくと、言つた。

「嫌な予感がするな・・・」

その呟きが耳に入ってきたのか、勇哉は口をへの字に曲げた。

戻されて失敗（後書き）

いつ終わるのかわかりません。

三週間程間を開けて投稿すると思います。

・・・日本だから、大丈夫ですよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8026z/>

神が創りしもう一つの世界

2011年12月25日19時54分発行